留学生・日本人学生協働で行う演劇への取り組み
－イプセン演劇上演へ向けて－

An action on the drama where international exchange students and Japanese students perform in collaboration
–For Ibsen drama presentation –

橋本　弘美[1]　大山　隆子[1]
Hiromi Hashimoto[2]　Takako Ohyama[2]

要　旨

札幌キャンパスでは主に北欧諸国及びロシアからの留学生を受け入れ，約 3 ヶ月間の日本語集中研修を行っている。2006 年はノルウェーの近代劇の父，ヘンリック・イプセンの没後 100 年の記念の年であり，北欧交流推進を目指している本学でもこの年を祝おうという運びとなった。また，本学の短期留学生と日本人学生の交流がそれほど盛んに行われていなかったため，日本人学生に呼びかけ，希望者を募り，留学生と共にイプセン劇の上演を行うことにした。

具体的には 15 週間の日本語コースの中に，演劇上演のための準備クラスを設け，演劇指導の教師，日本語指導の教師，アクター，プロンプター役の留学生，および日本人学生とで共に準備，上演をした。この劇を通して，留学生は日本語を話すのに自信を深め，また日本人学生からも，留学生と協働で行った作業はこれからの自信になっていくとの声が聞かれた。今後も，留学生と日本人学生が協働で作り上げられるような活動を進めていきたい。この実践の概略は，学会で報告した（大山他 2007）。

キーワード：留学生と日本人学生，協働活動，演劇，ヘンリック･イプセン，実践報告
Keywords: International exchange students and Japanese students, Collaboration activity, Drama, Henrik Ibsen, Practice report

1. はじめに

東海大学札幌キャンパスでは，スウェーデン，ノルウェー，フィンランドからの北欧諸国及びロシア極東地域からの留学生を受け入れ，約 3 ヶ月間の日本語集中研修を行っている。留学生は学内に隣接された国際交流会館と呼ばれる寮に滞在し，日本語クラスに参加している。この国際交流会館の 2 階に日本語クラスの教室があり，3 階が彼らの住む寮であるため，留学生は授業が終わるとすぐに寮に戻ってしまい，学内を歩いたり日本人学生と積極的に交流したりする姿よりも，留学生同士の行動が多く見受けられる。本学が目指す学生間交流は，一部ク

[1] 東海大学国際文化学部国際コミュニケーション学科，005-8601 札幌市南区南沢 5 条 1 丁目 1-1
[2] Department of International Communications, School of International Cultural Relation, Tokai University, 5-1-1-1 Minamisawa, Minami-ku, Sapporo 005-8601, Japan

ラブ参加者間ではあるものの，学内全体を見るとそれほど活発に交流が行われているとは言いがたい。そこで，日本語習得のみならず，留学生と本学日本人学生とが時間を共にし，協働[3]で取り組める活動を考えた。その試みのひとつとして日本語でイプセン演劇を企画し，上演することとした。

本稿は，留学生・日本人学生が協働で作り上げたイプセン演劇上演までの実践報告である。

2. なぜイプセン演劇なのか

この企画を考えた 2006 年は，「近代劇の父」と称されるノルウェーの劇作家ヘンリック・イプセン（1828 - 1906）の没後 100 年に当たる年だった。ノルウェー文化省は，2006 年を「イプセン・イヤー」と定め，ノルウェー及び日本を含む海外でイベントをし，世界各国で記念すべきこの年を祝うことを決定した。（駐日ノルウェー王国大使館（2006））特に 2006 年秋学期は，ノルウェーからの短期留学生を受け入れていたこともあり，当大学でも，この記念すべき年を祝おうということになった。そこで留学生と本学日本人学生に呼びかけ，協働でイプセン演劇を上演するプロジェクトを立ち上げることにした。（以下イプセン演劇プロジェクトと呼ぶ）。上演当日は，ノルウェー参事官も伝統衣装であるブナードを着て，観劇にお越しいただけることが早い時点で決まっていた。上演劇は，「人形の家」「ペール・ギュント」「ヘッダガブラー」など有名なイプセン作品に目を通し，学生の話し合いの中から，また参加者の人数も考えて，家庭劇である「野がも[4]」に決定した。50 分という限られた時間で「野がも」第 2 幕を前半と後半に分けダブルキャストで，すべて日本語で上演する運びとなった。

3. 実施内容

3-1. 目的

本学が推進している北欧交流の一環として，この記念すべき 2006 年イプセン・イヤーを盛り上げるため劇の上演を取り入れ，留学生・日本人学生との協働作業を目指すことを目的とした。

3-2. 対象者及び関わった人

2006 年秋学期ノルウェー・オスロ大学からの留学生 11 名（男子学生 5 名／女子学生 6 名）と，スウェーデン・ダーラナ大学からの男子学生 1 名の，合計 12 名である。ノルウェーからの留学生は，1 年間母国で日本語を勉強してきた。レベルは初中級で，全員が初めての来日である。演劇の経験は全員，まったく無しとのことだった。

---

[3] 「協働(collaboration)』を互いに協力して何かをつくりあげる創造的な活動を行うこととし，そこではひとりでなしえなかった創発が起きると考える。そして協働がおきることを目指した学習を「協働的学習」と呼ぶ。(舘岡 2005 (p.96))

[4] **『野がも』あらすじ**：
写真屋を営む夫婦ヤルマールとギーナ，その愛娘であるヘドヴィックと，ヤルマールの父老エクダル。この慎ましく平和な家庭に，ある日，ヤルマールの親友であり豪商ヴェルレ氏の息子であるグレーゲルスが尋ねてくる。どこかほの暗い正義感を胸に抱いているグレーゲルスは，自分の父親とギーナが過去に関係を持ち，その結果生まれた子どもがヘドヴィックだという秘密を知り，それをヤルマールに伝え，自分の正義を貫こうと考えていた。自らの正義を貫くことが正しいことになるのか。この疑問を投げかける鍵となるのが「野がも」とそれを引き上げてくる「猟犬」である。
今回上演した第２幕は，その２つの鍵である「野がも」と「猟犬」，つまり隠された秘密と，それを暴こうとするグレーゲルスが登場し，波紋を招く場面である。

本学からは希望者を募り，日本人学生 11 名が参加した。（男子学生 3 名／女子学生 8 名）また教員は，演劇指導として本学札幌教養教育センター増山みどり先生，日本語指導の大山，橋本の 3 名で行った。

3-3. 練習時間

このイプセン演劇プロジェクトでは，15 週間の短期留学生日本語プログラムの中に週 1 回 90 分，演劇上演へ向けた準備クラスを設けた。この時間では，台本の読み方，言葉の意味，言い回しなどの練習を，ペアやグループなどで行った。また，週 1 回放課後（水曜日 4 時限目終了時）にも時間をとり，このときは，留学生，日本人学生，教員が集合し，大教室を借りて，台本の読み合わせ，立ち稽古などの合同練習を行った。表 1 のように役割分担を行った。

表 1　役割分担

グループ	配役	アクター	プロンプター	サポーター
グループ 1	ヤルマール	留学生①（M）	留学生⑤（M）	日本人女子学生 F
（前半）	ギーナ	日本人女子学生 A	留学生⑥（F）	日本人女子学生 G
	ヘドヴィク	留学生②（F）	留学生⑦（F）	日本人女子学生 H
	老エクダル	日本人男子学生 B	留学生⑧（M）	
グループ 2	ヤルマール	留学生③（M）	留学生⑨（M）	日本人女子学生 I
（後半）	ギーナ	留学生④（F）	留学生⑩（F）	日本人男子学生 J
	ヘドヴィク	日本人女子学生 C	留学生⑪（F）	日本人女子学生 K
	老エクダル	日本人女子学生 D		
	グレーゲルス	日本人男子学生 E	留学生⑫（M）	日本人女子学生 L

3-4. 役割分担

イプセン演劇プロジェクトを始めるに当たり，活動内容の説明等を行ったが，留学生 12 名のうち，「舞台に立ちたい」と述べた者，また恥ずかしい，日本語に自信がない等の理由で「舞台には立ちたくない」と述べた者でちょうど半々に分かれた。アクターの人数の関係もあったため，舞台に立つことを希望する人には，日本人学生も交えてオーディションを行い，役を決めた。留学生は 4 名（男子学生 2 名／女子学生 2 名）がアクターに選ばれた。また，舞台に立ちたくないと述べた人たちも，何らかの形で演劇に関われるように，『プロンプター』を作った。プロンプターとは，常時舞台袖に立ち，アクターが台詞を忘れてしまったときにそれを教える黒子的な役目である。日本人学生には，アクターに加え，留学生に日本語の意味や発音などを教えるサポーターについてもらった。授業時にはカバーできなかったところも，この合同演習のとき，日本人学生から教えてもらえるような体制にし，アクター・プロンプター・サポーター三人四脚で練習を行う。つまり，一つの配役に対して，最低 3 名が責任を持って関わるという連携の形である。プロンプターの留学生には，当日の司会進行役も務めてもらった。役割を表にすると表 1 のようになる。

3-5. 上演までのスケジュール

表 2 のように，第一回目の練習は，本番の約 2 ヶ月前，立ち稽古は約 1 ヶ月前，前日リハーサル，そして本番は 12 月 14 日であった。

『野がも』第二幕を，一部と二部に分け，それぞれダブルキャストで上演した。

表 2　スケジュール

打ち合わせ回数	日付	練習内容
1	10 月 2 日	準備・今後のスケジュールについて（オリエンテーション）
2	10 月 11 日	オーディション（翌日に役を決定）
3	10 月 18 日	ペア練習・発音指導
4	10 月 25 日	グループ練習・発音指導
5	11 月 8 日	全体通し練習
6	11 月 15 日	全体通し練習
7	11 月 22 日	舞台に立ち稽古（プロンプターつき）
8	11 月 29 日	舞台に立ち稽古（プロンプターつき）
9	12 月 1 日	大道具貸し出し・移動他
10	12 月 6 日	ポスター作成・掲示・衣装決定・舞台に立ち稽古（プロンプターつき）
11	12 月 7 日	グループ練習・舞台に立ち稽古（プロンプターつき）
12	12 月 8 日	舞台に立ち稽古『WebCity 札幌』に原稿アップ・冒頭の挨拶・司会の練習
13	12 月 13 日	リハーサル・配布しおり印刷・アンケート印刷
上演当日	12 月 14 日	17：00 より N601 教室にて本番

図 1　イプセン演劇プロジェクトの合同練習で，日本人学生と台詞の読み合わせを練習する留学生

留学生はこのような練習のほか学内にポスターを作り，掲示をした。またこのイプセン演劇プロジェクトのことを，インターネットの記事や地元紙に取り上げてもらうなど，事前に広報活動も行った。

図 2　立ち稽古で練習する留学生たち

4. 結果

4-1. 観客の声

2006 年 12 月 14 日イプセン演劇「野がも」を上演。地域の人にも大学の取り組みを理解してほしく一般公開とし，上演後は観客およそ 60 名からの大きな拍手があった。

上演後に行った意見・感想シートでは，次のような声が聞かれた。

・とても面白かったです。留学生の真剣な顔を見たとき，この劇への強い気持ちが伝わりました。留学生にとって日本語での台詞というのはとても難しいことだったと思いましたが，日本語の上達にはとても良い手段だったのかもしれませんね。

・今回のイプセン劇はとても良かったと思います。出演者のみなさんもとても一生懸命やっている姿が印象的です。ただでさえ留学生のみなさんは母国語ではない言葉を話すことは難しいことなのに，それを劇として発表し，人を楽しませることは素晴らしいことだと感じました。

・留学生の日本語が明瞭でよく分かりました。よく練習したと感心しました。共同で何かをすることが学生には良い思い出になると思いました。

・日本人学生との息もピッタリだったし，とても良かったです。皆で作り上げたんだなあというのがよく分かりました。

これらの声からもわかるように，短期間であれだけの日本語を覚えることができたことへの感嘆，彼らの努力を讃える声，もっと続きを見たかった等，肯定的な感想がたくさん書き込まれていた。また，この年にイプセン劇を上演した大学は，日本では唯一だったとのことで，ノルウェー参事官も当大学の取り組みを高く評価してくださった。

4-2. 留学生の声

上演後の留学生へのインタビューでは，全体的に日本語学習の上で役に立ったとの意見が多かった。例えば，今までは，日本語で話すことに消極的だったが，演劇でたくさん練習をしたので，大きな声で自信を持って話すことができるようになった，また日本人に質問することに抵抗がなくなった等である。これらは舞台に立ったアクターからの声である。

一方プロンプターも，初めのうちはアクターと共に台詞を覚え影の役者として活躍し，二人三脚でやっている感覚が強かったが，後半に入りアクターが完全に台詞を覚えてしまうと，自

分の必要性が薄くなっていくように感じられ，時間を持て余してしまったとの意見があった。プロンプターとしてアクターにずっとついているのではなく，時間をうまく配分して衣装や小道具の作成に関わりたかったとの声が聞かれた。

4-3.　日本人学生の声

日本人学生にとっても，あまり話す機会のなかった留学生と身近に接する機会が増えたため，共に協働で行った活動は今後の自信になっていく，毎回の練習を重ねていきながら，留学生と仲間になれたと感じているとの声が聞かれた。

5.　考察

以上，2006 年秋学期にイプセン劇の上演を取り入れ，留学生・日本人学生との協働作業を目指した。留学生はこの練習・実演を通し，日本語を話すのに自信を深めたと考える。日本人学生にとっても，あまり話す機会のなかった留学生と身近に接する機会が増えた点は評価できる。しかし，アクター以外の留学生にとっては，やや退屈な時間もあり，もっと彼らの個性が生かせるようにすべきであった。インタビューのときにも意見として聞かれた，道具，衣装などの担当を増やす工夫が必要だったろうと思われる。同じ時間を費やし同じ台詞を覚えたのに，片方は舞台に立ってスポットライトを浴び，片方は影の役割であったため，アクターへの羨望が感じ取れた。これは裏を返せば，練習を始める前の説明会で，恥ずかしい，日本語に自信がないと言い「舞台には立ちたくない」と述べた者たちが，アクターと共に練習をしていくことで，当初持っていた自分の枠組みを超え，自分も何かがしたい・自分もアクターをやれば良かったという気持ちや感情の変化である。したがって，プロンプター自身にもスポットライトが当たるような仕掛けや試みをしていくべきだったろう。そして，教師は，この彼らの心的変化も含め，動機付けを行っていく必要があると思われる。

この「演劇」という活動そのものが初めての試みであり，加えてイプセン演劇当日には，ノルウェー参事官もお越しいただくことがすでに決まっている状態からのスタートだったため，演劇を成功させなければならないという思いやプレッシャーが強く，教師側は留学生に難しく長い台詞を覚えてもらうことばかりに気をとられがちだった。そのためスケジュール管理等含め，どちらかというと教師主導の割合が高かったように思われる。学生は，積極的に参加していないというわけではなかったが，もしかすると「やらされている／やらなくてはいけない」という感想を持った者もいたかもしれない。もっと彼らにイニシアティブをとってもらい，モチベーションを高めていく方法があったのではないだろうか。上演後のインタビューからも，役割分担，および協働活動の中にも個々人の個性を生かす場作りや仕掛けが必要であると考えた。具体的には教師側からの問いかけなども考えられる。問いかけ，引き出し，学生の意見や声を段階的に取り入れていけば，活動に対しもっと前向きに楽しく参加してもらえただろうと思われる。

6.　今後に向けて

今後は，学生の意見をもっと取り入れて，学生がその個性を生かし，自ら決定し，進めていけるような場を意識しながらプロジェクトを作り上げていきたい。

今回は，外国語を使って「演劇」をする点で，スタート時点からややハードルが高いと感じ

た留学生もいた。そのためプロンプターという役割を作り，影の役者になってもらい練習を重ねてきたが，イプセン演劇プロジェクトが終わってからの声から考察されるように，やはり，一人ひとりの個性を生かしつつ，全員がステージに立ち，発表ができ，達成感が得られるようなプロジェクトの可能性を考えていきたい。また，日本人学生との交流の場となるような協働活動も視野に入れ，大学全体を巻き込みながら，短期留学生受け入れプログラムを考えてきたいと思っている。

参考文献

駐日ノルウェー王国大使館（2006），『イプセンハンドブック』，駐日ノルウェー王国大使館

舘岡洋子（2005），『ひとりで読むことからピアリーディング』東海大学出版会，94-105

大山隆子，橋本弘美（2007），「留学生・日本人学生協働で行う日本語コース実践授業ーイプセン演劇上演への取り組みー」『「実践研究とは何かー私にとっての実践研究ー教育現場からの日本語教育実践研究フォーラム」予稿集』，日本語教育学会，31-34

（受付：2009 年 8 月 28 日，受理：2009 年 10 月 6 日）